

九州支部

血清蛋白、血清 LDH の値は予後に影響を与えておらず、癌性心外膜炎のコントロールが重要な予後因子と考えられた。また心室内化学療法を施行された症例の多くで著明な performance status の改善が認められ、予後に影響を与えていたものと考えられた。検査発見群などの performance status が良好な症例を対象に治療の有効性や治療方法の有効性を検討していく必要があると考えられた。

24. 術後肺癌脳転移症例の治療と予後因子の検討

国立病院九州がんセンター呼吸器部

池田二郎、麻生博史、福山康朗
牛島千衣、山口正史、照屋孝夫
一瀬幸人

【目的】肺癌の術後脳転移再発例を中心にその治療法と予後因子について検討した。【対象および結果】当院で切除された肺癌症例のうち術後に脳転移をきたし治療した 84 例を対象とした。男/女：55/29、平均年齢 61 歳、組織型は Ad/Sq/La/Sm/その他：57/13/2/5 /7、p-stage I/II/III 以上：32/12/40、脳転移個数は 1 個/2~3 個/4 個以上：38 /26/19 で、脳転移最大径の平均は約 2.7cm であった。脳転移の治療は ①全脳照射 75 例 ②ガンマナイフ 12 例 ③切除 9 例で、①②の併用 5 例①③併用 7 例①②③の併用 2 例であった。肺癌切除後から脳転移再発までの平均期間は 13.7 カ月で脳転移治療からの MST は全体で 11.2 カ月であった。予後因子別では性別、転移再発形式において多変量解析で有意差を認めた。治療効果別 MST (月) は画像判定で有効/無効：13.7/8.2 と差がなかったが、症状改善度別では消失/改善/無効：17.7 /10/2.3 と有意差を認めた。

25. 肺動脈に浸潤した転移性肺腫瘍に対する肺動脈形成術

長崎大学医学部第一外科

岡 忠之、赤嶺晋治、永安 武
村岡昌司、綾部公懿

長崎大学医療技術短期大学部

田川 泰

【目的】骨肉腫の肺転移症例に対して右肺上・中葉切除と肺動脈管状切除・端々吻合により、右肺全摘術を回避し

肺機能温存術を施行した症例を経験したので報告する。【症例】22 歳の男性で 1993 年左脛骨の骨肉腫の診断で手術と化学療法をうけた。1995 年右肺への転移に対して S² 区域切除と下葉の部分切除を、左肺への転移に対して上葉の部分切除をうけた。2000 年 2 月右肺上葉に転移巣が再び出現し手術を施行した。腫瘍の一部は中葉と S⁶ へ浸潤しており、また A^{1~3} の分岐部直下から A⁶ 分岐部までの肺動脈への浸潤ありと判断した。右上中葉切除と肺動脈浸潤部の肺動脈管状切除・端々吻合術により右肺底区を温存した。術後に化学療法を施行し、術後 15 ヶ月の現在再発なく生存中である。【結語】肺動脈に浸潤した転移性肺腫瘍に対し、肺動脈形成術は肺機能温存とともに根治性を損なわない有用な術式である。

26. 胸骨つり上げ法による胸腔鏡下縦隔腫瘍切除の検討

国立病院九州医療センター呼吸器外科

中尾真修、山崎宏司、竹尾貞徳

当院では独自の胸骨つり上げ法による胸腔鏡手術を開発し前縦隔腫瘍を適応としてきた。本法にて胸腺腫に対しては拡大胸腺摘出術を行い、両側胸腔内に及ぶ前縦隔腫瘍に対しては腫瘍摘出術を行っている。本法の利点として、従来の正中切開に比べ、傷が小さく術後疼痛が少ないこと、胸骨つり上げにより前縦隔の広い視野が確保できることなどがあげられ、また欠点としては、操作が胸腔鏡によるものため正中切開に比べ手術時間が長いことなどである。本術式の適応は、胸腺腫であれば正岡分類の 3 期の肺、心膜浸潤まで応用可能である。また、腫瘍の大きさに関係なく、両側胸腔に及ぶ良性疾患などもよい適応となる。これまで当院で本術式を施行した 11 例に関して、臨床的検討を加え報告する。

27. 当院における肺癌に対する胸腔鏡下肺葉切除術の現況

済生会福岡総合病院外科

岡 武志、山本一治、中島秀彰

福田篤志、松田裕之、松浦 弘

岡留健一郎

【目的】当院における胸腔鏡下肺葉切除術(VATS)について検討した。【対象】

最近の約 2 年間に病期 I 原発性肺癌に対して VATS を施行した 5 例を対象とした。【方法】側臥位にて聴診三角上に約 5~10cm の小開胸創をおき、第 5 肋間前腋窩線、第 7 肋間中腋窩線にそれぞれ 12mm の port を挿入し、肺静脈、肺動脈、気管支の順に自動縫合器を用いて切離し、肺葉を摘出した。リンパ節廓清は ND_{1,a} で施行した。【結果】組織型は腺癌 4 例、扁平上皮癌 1 例。切除肺葉は右上葉 1 例、右中下葉 1 例、右下葉 2 例、左上葉 1 例であった。手術時間、術中出血量は平均で 244 分、178 ml であった。全例 20 日前後で退院となった。【結語】開胸手術に対し VATS は侵襲が少なく、術後の疼痛も少ない為立ち上がりが良い。今後は N₂ 症例にも施行を考えていきたい。

28. 末梢小型(2 cm 以下)肺癌の臨床的検討

佐賀県立病院好生館呼吸器外科

坂田 敬、古川次男

【目的】末梢小型(2 cm 以下)肺癌症例を解析し、術式の選択、縮小手術の妥当性について検討する。【対象】1982 年~2001 年 5 月までに当科で手術を施行した原発性肺癌症例 729 例中末梢小型(2 cm 以下)肺癌症例 117 例を対象とした。【結果】性別は男性 65 例女性 52 例と女性が多い傾向にあり、年齢は 41 歳から 81 歳平均 64.6 歳であった。喫煙指数は非喫煙者 54 例を含む約半数の 59 例が 200 以下であった。発見動機は CT 検診を含む検診発見が 96 例、有症状例 20 例、組織型は腺癌 77 例、肺胞上皮癌 17 例、AAH 3 例、扁平上皮癌 12 例、腺扁平上皮癌 4 例、大細胞癌 1 例、小細胞癌 2 例、カルチノイド 1 例であった。多発肺癌、他臓器の重複癌症例が 14 例みられた。術式は肺葉切除が 103 例、胸腔鏡下を含む部分切除が 14 例であり、最近では縮小手術が増加している。予後、リンパ節転移の検討から術式の選択について考察する。

29. 腫瘍径 5 cm を超える肺野型肺癌切除症例の検討

大分県立病院胸部外科

山崎直哉、内山貴堯、山岡憲夫
能村正仁、宮崎拓郎